

日本宋代文学学会 第四回大会

—プログラム—

- 日時：2017年5月27日(土) 9:30 開場 10:00 開始
- 会場：岡山大学津島キャンパス 創立五十周年記念館 2階大会議室
- 参加費：1,000円

午前の部 10:00～11:45

9:30 開場 / 受付開始

10:00 主催校あいさつ 岡山大学 藤原 祐子
会長開会あいさつ 大阪大学 浅見 洋二

(I) 10:15～10:45 幕末・明治における唐宋古文—藤森弘庵『東坡策』を中心に

大阪大学外国人研究員 黄 小珠
司会：神戸市外国語大学 紺野 達也

(II) 10:45～11:15 南宋中興期における蘇軾—陸游と范成大の場合—

東洋大学 坂井 多穂子
司会：日本学術振興会特別研究員(PD) 甲斐 雄一

(III) 11:15～11:45 宋自遜的家世、生平與交游、創作考論

湖北大学 熊 海英
司会：青山大学(非常勤講師) 加納 留美子

—昼休み(11:45～13:30)—

- ・理事会 12:00～12:15
- ・評議員会 12:15～12:45

午後の部 13:30～17:30

(IV) 13:30～14:00 今日から見た陳衍の『宋詩精華録』—同書出版80年に際して—

愛知大学 三野 豊浩
司会：金沢大学 原田 愛

(V) 14:00～14:30 宋代詩經学における詩篇の内容の重層的把握の発展、および詩序の意義

慶應義塾大学 種村 和史
司会：同志社大学 副島 一郎

—休憩（14:30～15:00）—

(VI) 15:00～16:45 シンポジウム

JSPS 科研費「宋人文集の編纂と伝承に関する総合的研究」班

宋代文学学会共催

第5回宋代文学研究国際シンポジウム

編纂と伝承—宋人文集をめぐって—

司会： 早稲田大学 内山 精也

① 『夷堅志』後十志の伝承—上海図書館黄丕烈校鈔本『夷堅志』について—

九州大学大学院 潘 超

② 南宋本『歐陽文忠公集』に見られる「統添」について

九州大学 東 英寿

③ 蘇軾文集の編纂と尺牘

大阪大学 浅見 洋二

—総合討論—

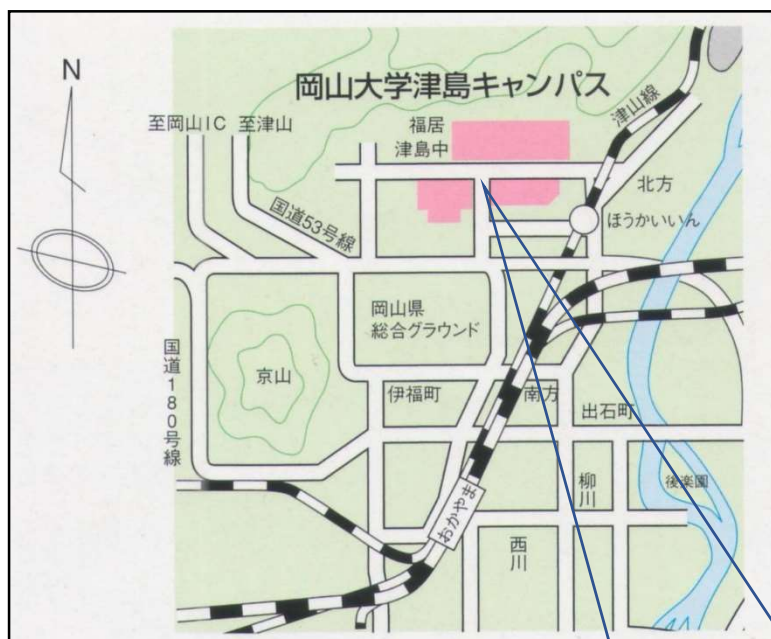
■総会 17:00～17:30

■懇親会 18:00～

会費：5,000円

会場：Jテラスカフェ

■大会会場（岡山大学津島キャンパス 創立五十周年記念館）■



■岡山駅西口バスターミナル 22 番乗り場
【47】系統

岡電バス：岡山大学経由岡山理科大学行
「岡大西門」下車

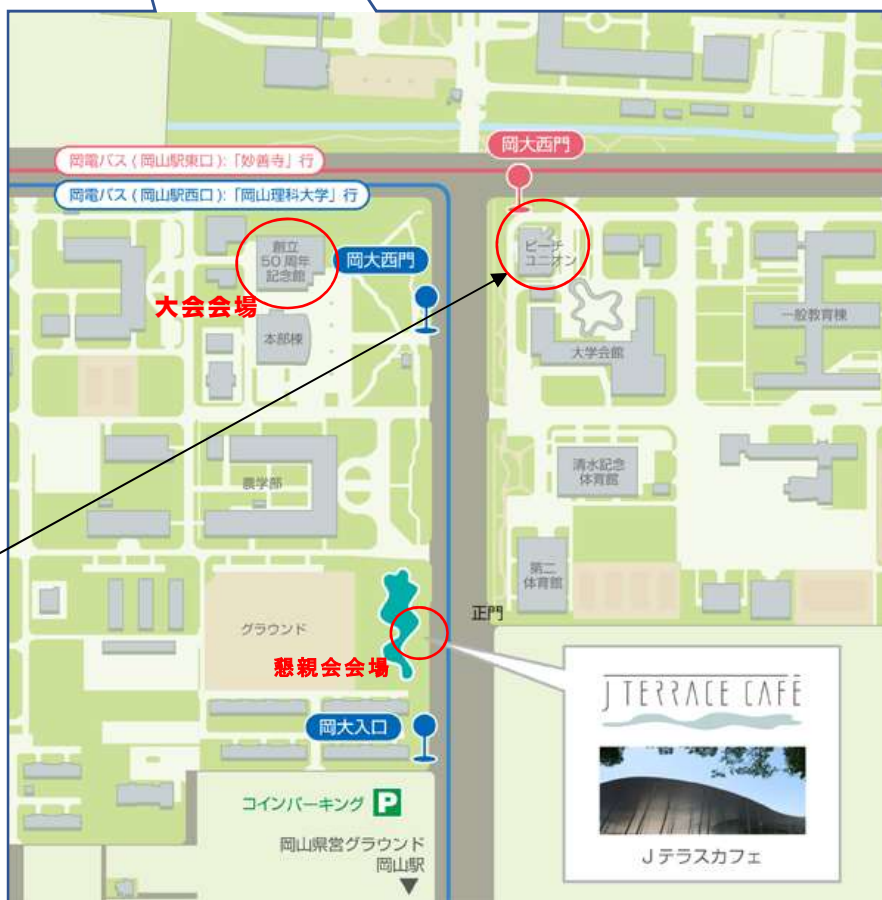
■岡山駅東口バスターミナル 2 番乗り場【17】
【67】系統

岡電バス：天満屋経由妙善寺行「岡大西門」
下車

■岡山駅西口からタクシーで約 10 分

■JR 津山線「法界院」駅で下車、徒歩約 10 分

■岡山空港 2 番乗り場 中鉄バス：岡山空港
リムジンバス岡山駅西口行き(A・B・C 特急)
「岡山大学筋」下車



※昼食については、各自ご持参いた
だくか、大学内のコンビニ・食堂(土
曜も一部営業)、或いは周辺の食堂・
コンビニをご利用ください。

準備の都合上、5月14日(日)までに、「大会・懇親会」の出欠をメールでお返事くださいます
ようお願いいたします。皆様のご参加をお待ちしています。

大会幹事 藤原 祐子(yueya1222@cc.okayama-u.ac.jp)

— 発表要旨 —

〔午前の部〕

(I) 幕末・明治における唐宋古文—藤森弘庵『東坡策』を中心に

大阪大学外国人研究員 黄 小珠

幕末勤皇の志士として知られる藤森弘庵(1799-1862)が編纂した『東坡策』は、宋代文人蘇軾(1037-1101,号東坡居士)の二十五篇の「進策文」に評点を加えたものである。弘庵の活躍した幕末には、「実用の学」が重視され唐宋古文が流行したが、『東坡策』にも「天下国家の責」という編纂目的が示される。また、『東坡策』は明の茅坤(1512-1601)『唐宋八大家文鈔』を底本としており、テキストの内容から見れば、茅坤の「古文を以て時文を為す」という観点を否応なく継承していると考えられる。本発表では、藤森弘庵『東坡策』を中心に分析し、幕末・明治初期という激動の時代において、唐宋古文がどのように受容されたかを考察したい。

(II) 南宋中興期における蘇軾—陸游と范成大の場合—

東洋大学 坂井 多穂子

南宋は建炎年間(1127-1130)以降、蘇軾の文章を學ぶことが盛んになった(陸游『老學庵筆記』卷八)というが、南宋中興期の士大夫は蘇軾をどのように受け入れたのか。発表者は前稿(「楊萬里は蘇軾の何を學んだか—一次韻と櫟括を中心に—」、宋代詩文研究會、『橄欖』第20號、2016年3月)において、楊萬里が如何に蘇軾を學んだかを考察したが、本発表では同じく南宋四大家に數えられる陸游と范成大を取り上げる。従来、陸游が杜甫の影響を、范成大が陶淵明の影響を受けたことについては指摘されているが、同一王朝の先人である蘇軾を、二人が如何にとらえていたかについての専論は多くない。

陸游と范成大はともに蘇軾の生地・蜀に赴任した経験があり、しかも、滞在時期も重なっていた。陸游「施司諫註東坡詩序」には、彼と范成大が蜀の地にあって蘇軾の詩について議論したエピソードも記されている。彼らが影響を受けた江西詩派の祖・黃庭堅は蘇軾の弟子である。『四庫提要』にも、「(范成大)蓋追溯蘇黃遺法」(集部十三・別集類十三「石湖集 三十四卷」)とも言う。本発表では蘇軾の「遺法」を二人が如何に「追溯」したかを考察し、あわせて前稿において論じた楊萬里の場合との異同についても考えてみたい。

(III)

宋自遜の家世、生平與交游、創作考論

湖北大学 熊 海英

方回の評判使宋自遜成为晚宋最有名的江湖诗人之一。宋自遜之父宋姓是官、学、文俱备的士大夫。宋氏兄弟六人中，一人易名参加科举，余皆为处士，安居于地方。宋氏不应科举或易名应举的直接原因是“庆元党禁”。淳祐五年贾似道赠金时，宋自遜并非漂泊江湖的谒客。宋氏兄弟的交游对象主要是诗人，以诗歌交游为纽带联结而成的网络涵盖了江南西路大部分地区。这些诗人有的是布衣，有的并未放弃应举入仕。他们大都有殷实的经济基础。与宋自遜相关的诗人约二十位，其生年跨度近 50 年，创作活跃期主要在嘉定年间和端平—淳祐间。他们都重视诗集的编纂和刊行。其中十五位一般归为江湖诗人，诗歌刊入《江湖》诸集的有十三人。

基于以上事实，江湖诗人并非仅是落魄江湖的谒客，也包括家境殷实的地方诗人。他们以诗人为社会身份、长时间停留在体制之外，原因各不相同。宋自遜周边诗人的创作风格丰富多样，大概而言近体受晚唐诗影响、趋于浅切流利。古体取法较广、从中唐上溯至汉魏六朝。多数江西诗人不学江西派；道学风气对他们写诗、论诗的影响很普遍；反映时局和社会的诗歌多从关涉实际生活的角度落笔，而非出于“先天下之忧而忧”的精英姿态。

方回对江湖诗人的简略评断很大程度左右了后人对这个群体的观察角度和看法。但是，这个南宋出现的新群体在百余年间并非静态存在、而是发展变化着的。也许根据时段、地域、对象等因素，把对江湖诗人群体的研究拆解为若干具体问题分别探讨，方能得到切近实际的判断。

[午後の部]

(IV)

今日から見た陳衍の『宋詩精華録』—同書出版 80 年に際して—

愛知大学 三野 豊浩

今年 2017 年は、陳衍『宋詩精華録』の出版から 80 年目にあたる。同書は『宋詩鈔』『宋詩紀事』など清代の各種宋詩選集の流れを汲むと同時に、錢鍾書『宋詩選注』をはじめとする 20 世紀の宋詩選集の出発点として位置づけることができ、過去を承け未来を拓く意義を有すると考えられる。本発表では、この比較的新しい「古典」に様々な角度から光をあててみたい。

- (1) 版本の問題。1937 年商務印書館版『宋詩精華録』の基本的な特色について。
- (2) 時期区分の問題。同書は宋詩を唐詩にならない初、盛、中、晩の四期に分類して収録するが、子細に見ると、分類が妥当でない作者が少なからず存在する。その理由を考える。
- (3) 収録作品の問題。同書所収の作品は『宋詩鈔』『宋詩紀事』『宋百家詩存』のいずれかに見える詩が全体の 9 割近くを占めており、残り 1 割ほどが陳衍独自の選擇と考えら

れる。本発表では主に南宋の代表的詩人たちの場合を例とし、陳衍の作品選擇のあり方について考える。

(4) 鄭思肖「畫蘭」をめぐる問題。卷四所收の鄭思肖「畫蘭」は、同書に於ける唯一の四言詩であるのみならず、元・陶宗儀の『南村輟耕錄』を出典とするなど異彩を放っている。宋末の遺民詩人である鄭思肖は陳衍と同じ福州の出身であり、同詩には陳衍の特別な思いが込められているのではないかと考えられる。

本発表ではこうした問題に對する卑見を述べ、大方の御指正を賜りたい。

(V) 宋代詩經学における詩篇の内容の重層的把握の発展、および詩序の意義

慶應義塾大学 種村 和史

詩經の詩篇は、古代の民間歌謠・儀禮歌という出自を持ちながら、儒教の經典として人々を道徳的に教化する役割を擔っていた。詩經解釋においても、作者の眞意・心情に迫りつつも、一方で道徳的教訓を読み取ることが求められ、そのような条件下で宋代には、道徳的メッセージの發信機能を小序に代替させることで詩篇自體の解釋の自由度を確保するという解釋戰略も行われた。宋代詩經學の大きなトピックである尊序・反序の問題を考える際、詩經の持つこのような兩義的性格のもとでの小序の機能と意義に注目すべきであり、尊序＝革新的、反序＝守舊的という圖式的な捉え方では詩經解釋學史の實相には迫れない。

宋代詩經學の解釋方法の発展に對する小序の寄與は、詩經の道徳性に關するのみに止まらなないと考えられる。宋代の詩經注釋においては、詩篇に詠われた世界が時間・場所・登場人物と歌い手といった點で重層的であるという認識に基づいて解釋を行い、これにより詩世界を濃密で餘韻あるものとし、作者や登場人物の心理に對する捉え方も細やかさを増している例が見られる。このような解釋方法も、小序に依據する解釋態度によって導き出された面があるのではないかと發表者は考えている。本発表では、この問題を検討し、尊序の詩經解釋學史における意義を考察したい。

(VI) シンポジウム

JSPS 科研費「宋人文集の編纂と伝承に関する総合的研究」班、宋代文学学会共催

第5回宋代文学研究国際シンポジウム

編纂と伝承—宋人文集をめぐって—

① 『夷堅志』後十志の伝承—上海図書館黄丕烈校鈔本『夷堅志』について—

九州大学大学院 潘 超

南宋洪邁(1123～1202)撰『夷堅志』は、元々は三十二志で、その三十二志は初志・支

志・三志・四志に分けられる。現存するのは、初志を由来とする前四志、支志及び三志を由来とする後十志のあわせて十四志であり、その後十志のテキスト来源については、通行本の編纂者である張元濟によれば、袁伯夔の所蔵だった「黄丕烈舊鈔本百卷」であり、また黄丕烈の校語もそのまま通行本に収録しているという。張元濟が用いた袁伯夔蔵本の亡佚により、通行本の底本の性格、黄丕烈の校勘経緯については、張元濟の跋文に依拠するしか方法がなかった。その一方、黄丕烈校一八〇卷『夷堅志』の鈔本が上海圖書館に所蔵されている(以下、上圖本と称す)。従来、この鈔本については、文献学的考証に乏しく、研究者はその鈔本を「黄丕烈所蔵舊鈔本」と見なし、通行本の底本だと考えてきた。

しかし、上圖本には黄丕烈の数多く校勘記が保存されており、この校勘記は全く現在の通行本に見えず、しかもその校勘記には、すでに残っていない宋刻本の異文が保存されており、それを通して通行本の底本の成り立ち過程について様々な角度から光を当てて考察することができる。そこで本発表では、上圖本を基礎資料として、この鈔本について文献的考証を加え、特に黄丕烈の校語を検討し、通行本の底本(後十志)の成り立ち過程、上圖本の真の性格、及びその中に保存されている宋刻本と舊鈔本の情報について明らかにしたい。

② 南宋本『歐陽文忠公集』に見られる「續添」について

九州大学 東 英寿

南宋刊本の『歐陽文忠公集』百五十三巻を調べると、しばしば巻末に「續添」という記載があり、その後には作品や校勘が掲載されていることがある。この「續添」部分には、後から付け加えられた作品や校勘があり、それは最初に編纂された時は無かった作品や校勘が添加されたことを意味している。南宋本の『歐陽文忠公集』としては、周必大の原刻本、中国国家図書館本(国図本)、天理本が知られているが、「續添」に注目すると、国図本や天理本の編纂過程、すなわち増補の過程が明らかとなる。そして、この増補部分にこれまで知られていなかった作品が存在することがあり、そのうちの一群が歐陽脩の新発見書簡96篇である。

更に、この増補部分に着目すると、書簡以外にも明代以降に伝わっていない作品が存在する。それは、『歐陽文忠公集』に収録されている『近体楽府』巻二部分において、国図本、天理本に「續添」として付け加えられた作品の後に、更に天理本のみ「續添」として付け加えられた「漁歌傲」十首であり、これらは新発見の96篇の書簡と同じように、明代以降のテキストには伝承されていない。従って、現在まで知られていない、新たな作品の可能性はあるが、実は今日にそれは伝承している。そして、その伝承の鍵は、『全宋词』を編纂した唐圭璋が握っていると考えられる。

このように、本発表では南宋本『歐陽文忠公集』に見られる「續添」に着目して、全集編纂の過程と作品の伝承について考察したい。

③ 蘇軾文集の編纂と尺牘

大阪大学 浅見 洋二

「尺牘」は、もともとは公表することを前提としない私的な書簡であり、そのため文集に収録されることはほとんどなかった。ところが、南宋期に編纂された蘇軾など主要な文人の文集には、多くの尺牘が収録されるようになる。

本発表では、蘇軾の文集に尺牘が収録されたことの持つ文集編纂史上の意義を考察するとともに、詩をはじめとする蘇軾の文学テキストの流伝・伝承において尺牘が果たした役割の一端を明らかにしたい。